

新品種候補 (2015年12月作成)

研究課題：シロクローバ「GC158」

担当機関：農研機構・北海道農研・酪農研究領域、上川農試・天北支場・地域技術 G、根
釧農試・研究部飼料環境 G、北見農試・研究部・作物育種 G、畜試・基盤研究
部・飼料環境 G

協力機関：なし

1. 来歴

- 1) 品種名 「GC158」(登録名称はタホラⅡ、読み：タホラツー)
- 2) 育成機関 Grasslanz Technology Ltd ニュージーランド
- 3) 導入者 ホクレン農業協同組合連合会
- 4) 登録 OECD 2012年登録 (Tahora Ⅱ)

2. 特性の概要 (標準品種「タホラ」との比較)

- 1) 長所：永続性と混播適性がやや優れる。
- 2) 早晚性：ほぼ同じである (表1)。
- 3) 小葉の大きさ：標準品種とほぼ同じで、小葉型のなかでも中である (表1)。
- 4) 混播適性：マメ科率は標準品種より同程度であるが (表2)、2、3年目の被度の標準偏差はやや低い (表1)。
- 5) 競合力：着花茎頻度はやや旺盛であるが、草丈はほぼ同じであり、クローバ被度も同程度であることから (表1)、競合力はほぼ同じとみられる。
- 6) 越冬性：標準品種なみである (表1)。
- 7) 永続性：3年目の晩秋の被度は3ポイント、秋のマメ科率は5ポイント標準品種より高く (表1)、永続性はやや優れる。
- 8) 収量性：多回刈りの年間合計収量は標準品種と同等である (表1)。兼用利用においては標準品種より6ポイント多収である (表2、3)。

表1 主要形質の調査結果

	GC158	タホラ	評価基準	備考
開花始日	7月20日	7月21日		北農研単播 2013
小葉長	1.75	1.67	cm	"
着花茎頻度	4.3	3.7	1無~9極多	3場所8調査平均
草丈(3年目、各番草平均)	18	17	cm	5場所平均(除兼用)
越冬性	6.3	6.4	1極不良~9極良	4場所平均
クローバ被度	48	47	%	5場所平均(除兼用)
2、3年目の被度の標準偏差	13.3	14.9		5場所平均(除兼用)
3年目晩秋のWC被度	33	30	%	5場所平均(除兼用)
3年目秋のマメ科率	30	25	%	5場所平均(除兼用)
兼用試験の2年間の乾物重	156(106)	148	kg/a	畜試、()は標準比

表2 季節別の乾物収量とマメ科率(2, 3年目の平均)

試験地	品種	春		夏		秋		2, 3年目年平均	
		合計収量	マメ科率	合計収量	マメ科率	合計収量	マメ科率	合計収量(標準比)	マメ科率
北農研	GC158	32.5	41	23.1	38	17.4	26	73.0 (100)	35
	タホラ	33.5	43	23.5	42	17.4	24	74.4	36
天北	GC158	23.9	28	31.9	44	15.4	35	71.2 (104)	36
	タホラ	24.1	29	29.2	44	15.0	33	68.3	35
根釧	GC158	33.9	27	43.3	59	11.8	42	89.0 (102)	43
	タホラ	33.9	34	42.7	68	10.6	46	87.2	49
北見	GC158	22.5	24	27.3	40	16.4	34	66.2 (97)	33
	タホラ	24.4	31	28.2	40	15.7	22	68.3	31
畜試	GC158	34.6	33	20.8	30	9.8	25	65.2 (102)	29
	タホラ	33.3	32	21.0	27	9.9	19	64.2	26
多回刈り	GC158	29.5	31	29.3	42	14.2	32	72.9 (101)	35
試験平均	タホラ	29.8	34	28.9	44	13.7	29	72.5	36

合計乾物収量kg/a、マメ科率はシロクローバの乾物割合%、春は5, 6月、夏は7, 8月、秋は9, 10月

表3 兼用利用試験の収量性(畜試)

年次 品種	1番草kg/a			2番草以降kg/a			年合計kg/a			乾物% マメ科率
	TY	WC	計	TY	WC	計	TY	WC	計	
2年目										
GC158	51.0	4.1	55.1	21.6	3.4	25.0	72.6	7.5	80.1	9.4
タホラ	52.0	3.5	55.5	21.9	2.9	24.8	73.9	6.4	80.3	8.0
3年目										
GC158	47.8	3.3	51.1	20.9	4.1	25.0	68.7	7.4	76.1	9.7
タホラ	42.0	3.1	45.1	18.9	3.5	22.4	60.9	6.6	67.5	9.8
2, 3年目合計										
GC158							141.3	14.9	156.2	9.5
タホラ							134.8	13.0	147.8	8.8

試験は採草、放牧の兼用利用を想定し、1番草のみチモシーの出穂期に合わせた刈取り、その後は多回刈りと同じ

3. 優良品種に採用しようとする理由

シロクローバは最も重要なマメ科牧草のひとつであり、タンパク質やミネラル、また、土壌への固定窒素の供給源として期待できる。「GC 158」は現在広く普及している「タホラ」に似ているが、永続性に勝り、道内の放牧向けシロクローバ品種として貢献することが期待できる。なお、本品種は既存優良品種「タホラ」の置き換えとする。

4. 普及対象地域及び普及見込み面積：

道内一円、4,000ha（道内の放牧地面積 65,000ha の約 6%）

5. 普及しうる種子量：8 トン（種子供給は平成 30 年を予定）

6. 栽培上の留意点：放牧用として、チモシーとの混播で利用する。